慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イカリア主義の歴史と歴史の中のイカリア主義 : Robert P. Sutton, Les Icariens : the utopian dream in Europe and America, (Urbana : University of Illinois Press, 1994)に寄せて
Sub Title	History of Icarianism and Icarianism in the history : Robert P. Sutton, Les Icariens : the utopian dream in Europe and America, (Urbana : University of Illnois Press, 1994)
Author	高草木, 光一
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1995
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.88, No.1 (1995. 4) ,p.125- 139
JaLC DOI	10.14991/001.19950401-0125
Abstract	
Notes	書評論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19950401-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」88巻1号（1995年4月）

書評論文

イカリア主義の歴史と歴史の中のイカリア主義

── Robert P. Sutton, *Les Icariens : The Utopian Dream in Europe and America*, (Urbana : University of Illinois Press, 1994)[*] に寄せて ──

高草木　光　一

I

思想家が提出した新たな社会構想，社会改革プランは，それが一定の支持層を獲得した瞬間から，現実の運動の場で試される時を待つ。それは二重の意味で思想が被る試練となるだろう。思想が受容されることは，それが変形され，俗化されることに他ならない。思想が本来持っていた理念までが裏切られる可能性を持つ。例えば，サン-シモン（Claude-Henri de Saint-Simon）の産業主義の理念がその死後サン-シモン教団という宗教セクトによって受け継がれたことはよく知られているし，1810年代の後半に執筆されたと言われるフーリエ（Charles Fourier）の『愛の新世界』は，その過剰な先駆性ゆえに弟子たちの手によって封印され，1967年まで公刊の日を待たなければならなかった。[(1)]

そして，運動が社会変革の意志を持ち続ける限り，政治闘争の場を避けて通ることはできない。「労働の組織」や「アソシアシオン」といった，1840年代のフランスに現れた様々な社会変革構想は，1848年革命の洗礼を受けなければならなかった。ルイ・ブラン（Louis Blanc）が『労働の組織（*Organisation du travail*）』で示した「社会的作業場（ateliers sociaux）」の構想は，彼が二月の臨時政府に閣僚入りした時から，革命の進行過程の中に組み込まれることを運命づけられていた。[(2)]「国立作業場（ateliers nationaux）」というルイ・ブランの意図と全く異なるものが臨時政

＊　本著作からの引用は，本文中に頁数のみを示すことにする。

（1）　cf. Charles Fourier, *Le nouveau monde amoureux*, manuscrit inédit, texte intégral ; établissement, notes et introduction de Simone Debout-Oleszkiewicz avec un dessin original de Matta, *Oeuvres complètes de Charles Fourier*, tome VII, Paris, 1967.

（2）　ルイ・ブランについては，高草木光一「ルイ・ブラン『労働の組織』と七月王政期のアソシアシオニスム──普通選挙と「社会的作業場」──（上）・（下）」（『三田学会雑誌』87巻3号，4号，1994年10月，1995年1月）を参照。

府によって作られた時，ルイ・ブランの政治的失脚は既に用意されていたとも言える。『アトリエ（*L'Atelier*）』が主張する労働者アソシアシオンは，六月蜂起後政府によって制度化された。それは，労働者の自律性に基礎を置く未来社会への展望がブルジョワ共和政の枠組みの中に包摂され，アソシアシオンの理念そのものが形骸化されたことを意味する。[3] 1848年革命が，結果として七月王政期に現れた様々な理念を解体させ，1851年のルイ・ボナパルト（Louis Bonaparte）のクーデタを迎えるのは歴史の皮肉である。

カベ（Etienne Cabet）の思想もまた，1840年代のフランスで「イカリア派」と呼ばれる勢力を得，1848年革命の試練を経ている。しかし，カベの思想とイカリア派の運動は，1848年後全く特殊な関係を持つことになる。カベとその弟子たちは，大西洋を渡り，アメリカでのコロニー建設にユートピアの夢を託したのである。七月王政期のフランスにアメリカのイメージを強烈に植えつけたのは，いずれも政府の命でアメリカに調査に赴いたトクヴィル（Alexis de Tocqueville）であり，シュヴァリエ（Michel Chevalier）だった。[4] トクヴィルの『アメリカにおける民主主義（*Démocratie en Amérique*）』（1835年，1840年）は「条件の平等化」をジャクソニアン・デモクラシーの時代のアメリカに見いだし，シュヴァリエの『北アメリカについての手紙（*Lettres sur l'Amérique du Nord*）』（1836年）は，貧困や階級対立のない産業化の進展を描き出している。[5] また，アメリカは多くの共同体建設の実験例を持っていた。[6] ラップ（George Rapp）派やシェイカー（Shakers）の宗教的共同体に続くオーエン（Robert Owen）派の共同体の実験（1825-28）は，夙に知れ渡っていた。[7]

（3） 1848年7月5日法による労働者アソシアシオンへの資金援助とその後の経過については，Octave Festy, *Les associations ouvrières encouragées par la Deuxième République*, Paris, 1915に詳しい。

（4） この時期のフランス人にとってのアメリカのイメージについては，松本礼二「フランス思想史におけるアメリカ問題――1750―1850――（下）」（『思想』683号，1981年5月）を参照。

（5） 例えば，『アトリエ』の編集者でもあったパリの印刷工ボワイエは，シュヴァリエがヨーロッパと対比的に描くアメリカの産業化に強いインパクトを受けている。cf. Adolphe Boyer, *De l'état des ouvriers et de son amélioration par l'organisation du travail*, Paris, 1841, pp.85-86, 91, 108, 113-115.

（6） 19世紀におけるアメリカでの共同体建設の実験については，古典として，John-Humphrey Noyes, *History of American Socialisms*, 1870, rpt., New York, 1961, Arthur Bestor, *Backwoods Utopias : The Sectarian Origins and the Owenite Phase of Communitarian Socialism in America, 1663-1829*, Philadelphia, 1950, 2nd ed., 1970等があり，邦語論文では，白井厚「社会主義揺籃の地・アメリカ」（アメリカ学会『アメリカ研究』14号，1980年）が，社会主義とアメリカの関係を簡潔に纏めている。アメリカにおける歴史的共同体については，1974年に発足した歴史的共同体学会の機関誌，*Communal societies : Journal of the National Historic Communal Societies Association*〔副題は，学会名変更に伴い，1991年から*Journal of the Communal Studies Association*に変わっている〕があり，イカリア派に関係する論文も数編掲載されいてる。

（7） この「ニュー・ハーモニー（New Harmony）」の実験については，白井厚『社会思想史論集』（長崎出版，1978年），上田千秋『オウエンとニュー・ハーモニイ』（ミネルヴァ書房，1984年），土方直史『協同思想の形成――前期オウエンの研究――』（中央大学出版部，1993年）等で紹介されている。

フーリエは，『産業的・協同社会的新世界』の中でオーエン派の実験を激しく批判し[8]，カベは，イカリア共同体建設計画をオーエンに打診している。

イカリア主義の歴史の検討は，カベの理念が様々な意味で現実の検証に付される過程を明らかにするだろう。七月王政期の社会変革思想の中で長期の「実験」が行われたのは，このイカリア主義だけである。確かに，フーリエのファランジュ（Phalange）構想もアメリカに渡っている。しかし，フーリエ自身は，アメリカに共同体を建設する意図はなかったし，フランスのフーリエ派にとっても，アメリカでの実験は寧ろ「外」の世界での出来事だった。フーリエ主義は「フランス人が輸出した思想体系ではなく，アメリカ人が輸入した思想体系[9]」であり，アメリカ人アルバート・ブリスベーン（Albert Brisbane）によって紹介されたフーリエの思想は，アメリカの風土に適合的に改変され，実に29ものフーリエ派の共同体が建設されたのである[10]。

フーリエ主義のアメリカでの受容が初めからアメリカ的だったのとは対照的に，1848年からおよそ半世紀続いたイカリア共同体は，『イカリア紀行（*Voyage en Icarie*）[11]』という「聖典」とカベという「教父」を持つフランス人移住者による共同体だった。ユートピアの理念が直接的に問われる半世紀のイカリアの歴史は，カベの思想が胚胎する空想性を剝ぎ取り，その矛盾を剔抉し，カベの歴史的意義の再検討へとわれわれを立ち戻らせるだろう。そして，この小さな歴史は，同時に，大西洋を挾む「世界史」の展開を纏っている。共同体はアメリカという土壌の上で生き延び，それぞれの思いを秘めた新しいメンバーはフランスから次々にやって来る。半世紀もの間，

(8) Charles Fourier, *Le nouveau monde industriel et sociétaire, ou invention du procédé d'industrie attrayante et naturelle distribuée en séries passionnées,* Paris, 1825, 2e éd., 1845, p.5. 田中正人訳，(『〈世界の名著42〉オーエン　サン・シモン　フーリエ』中公バックス，1980年)，445頁。

(9) Bestor, *op.cit.*, p.266.

(10) cf. Carl J. Guarneri, *The Utopian Alternative : Fourierism in Nineteenth-Century America,* Ithaca, 1991.なお，この著作の基礎になっているPh.D論文 "Utopian Socialism and American Ideas : The Origins and Doctrine of American Fourierism, 1832-1848" (Johns Hopkins University, 1979) には邦訳がある（宇賀博訳，『共同体主義――フーリエ主義とアメリカ――』恒星社厚生閣，1989年）。

(11) 『イカリア紀行』の初版は，*Voyage et aventures de lord William Carisdall en Icarie,* traduit de l'anglais de Francis Adams par Th. Dufruit, Paris, 1840 であり，匿名で出版されている。同じ題名の私家版は1839年に印刷され，カベ自身によって頒布されていたと言われる（cf. Christopher H. Johnson, *Utopian Communism in France : Cabet and the Icarians, 1839-1851,* Ithaca, 1974, p. 62. Jules Prudhommeaux, *Icarie et son fondateur Etienne Cabet : Contribution à l'étude du socialisme expérimental*, Paris, 1907, 1925. pp.xvii-xviii)。1842年版から実名で出版され，表題も *Voyage en Icarie* と改められた。その後，1845年，1846年，1848年と，計5版が出版されている（cf. Henri Desroche, "Préface," in Etienne Cabet, *Voyage en Icarie*, présentation d'Henri Desroche, Genève, 1979)。なお，この著作からの引用は，1840年版と1848年版を用い，それぞれ，*V.I* (1840)，*V.I.* (1848) の略号を用いる。

両国の思想史・運動史の展開と無関係に共同体が存続することはありえない。イカリア共同体は，「世界史」のある断面を照射するひとつの光源になる可能性を持っているのである。

II

カベの名は，常に『イカリア紀行』と共にある。1788年ディジョン（Dijon）に生まれ，復古王政下で秘密結社カルボナリに入り，七月王政初期には共和派の論客として活躍したカベは，1834年，国王ルイ・フィリップ（Louis Phillipe）への筆禍事件でイギリスに亡命する。39年に帰国するまでの5年間，この地で彼の共産主義思想の骨格が出来上がったと言われている。『イカリア紀行』は，1848年までに5版を数え，そのユートピア的共産主義思想は，1841に再刊された『ル・ポピュレール』[12]紙を通して，都市の熟練労働者層を中心に広範な影響力を持つようになった。1847年，同紙にカベのイカリア移住計画が発表されると，テキサスへの移住が準備され，先遣隊は，1848年二月革命勃発の直前，アメリカに向かった。二月革命期には，カベは「中央友愛協会（Société fraternelle centrale）」を組織し，3月17日の普通選挙延期要求のデモでは，「中央共和協会（Société républicaine centrale）」を組織したブランキ（Auguste Blanqui）等とともに共和主義の立場から指導的役割を果たしている。その後，反共のうねりの高まりとともに，カベの共産主義は群衆の標的にされ，4月の立憲議会選挙でも落選，同年末共同体建設のためにテキサスに向かって旅立った。アメリカでの実験はイカリア派内部の分裂を引き起こし，カベは失意のうちに1856年セントルイスで没している。

カベが描く理想の共産主義国家イカリアは，余りにも「空想的」である。そこには，貨幣も，商取引もなく，重大な犯罪の起こる可能性もないので司法・警察組織さえ必要ないとされている。政治的には，人民主権の原理が貫かれているイカリア国は，七月王政への批判としての役割を果たしているとはいえ，社会・経済組織の過度の理想像は，産業化が進行しつつあった同時代のフランス社会への鋭利な分析を含んでいるとは看做し難い。[13]

研究史を振り返ってみても，カベの思想史的研究がこれまで多くの蓄積を持っているとは言えない。1907年，プルドモーによる初の本格的な伝記的研究『イカリアとその創設者E・カベ』[14]が公刊された後は，1974年のジョンソンの『フランスにおけるユートピア的共産主義――カベとイカリア派――』[15]が，カベ

(12) 1833年9月1日に創刊された *Le populaire : Journal des intérêts politiques, matériels et moraux du peuple* は，1835年10月4日号で終わっている。1841年3月14日に再刊第1号が *Le populaire de* 1841 *: Journal de réorganisation sociale et politique* として発行され，1847年4月4日号から *Le populaire de* 1841 *: Journal de réorganisation* と表題を改め，1851年10月4日号まで続いた。

(13) cf. Johnson, *op.cit.*, p.18.

(14)(15) 註(11)を参照。なお，わが国における最近のカベ研究としては，中谷猛『近代フランスの思想と行動』（法律文化社，1988年），第三章「E・カベと平等的共同社会論」がある。

の思想の労働者への浸透・普及の過程を辿り，その歴史的位置づけを試みた業績として残っているが，それ以外にはめぼしい研究成果は現れていない。この度上梓されたサットンの『イカリア派――ヨーロッパとアメリカにおけるユートピアの夢――』は，20年ぶりにこの二著作の空隙を埋める本格的な研究であり，今後のカベおよびイカリア派研究の水準と方向を示すものとなるだろう。まずは，本書の構成から著者の問題意識を探ることにしよう。

【目次】

序文

第1章　起源

第2章　イカリアの構想

第3章　フランスのイカリア主義

第4章　移住

第5章　最初のアメリカのイカリア

第6章　「財産共同体（*communauté de biens*）」とノーヴー（Nauvoo）

第7章　分裂

第8章　チェルトナム（Chertenham）――都会のイカリア

第9章　コーニング（Corning）――コミューン

第10章　最後のイカリア――若きイカリア，イカリア・スペランツァ，新イカリア

エピローグ

本書は，大きく分けて三つの部分によって構成されている。第1章から第4章までは，『イカリア紀行』に示されるカベの思想の特質とフランスにおけるその普及が対象であり，第5章から第7章までは，アメリカでのイカリア建設の実態の叙述と分析に当てられている。第8章から第10章では，カベ没後のイカリア共同体の推移が扱かわれている。つまり，本書の意図は，イカリア主義の本格的な通史を描くことにある。プルドモーの著作はイカリアの通史として書かれているが，「イカリア主義を本質的にその創設者の伝記として提示した」（p.1）点にその特徴と限界がある，とされる。カベが後景に退いた場面や，特にその死後に関しては多くが語られていない。基本的にカベへの共感によって貫かれているこの著作は，批判と分析に欠ける上に，その出版以後，多くの新資料が発掘されている。また，その後に現れたジョンソンの研究は，1848年までのフランスにおけるイカリア主義が分析の対象となっている。このような見解に立って，サットンは，新資料を駆使した包括的なイカリアの理念と運動の歴史を描こうとしたのである。

こうした新しい研究を可能にさせたのは，著者自身が教授を務めるウェスタン・イリノイ大学（Western Illinois University）に1976年に設立された「イカリア研究センター（Center for Icarian Studies）」の膨大な一次資料である。イカリア共同体建設の地，イリノイ州ノーヴーに近い同大学は，アメリカにおけるイカリア主義関係の資料を精力的に収集し，1990年までに一応の完成を見ている。サットンは，この資料を基礎にしつつ，パリの国立古文書館（Archives Nationales），国立図書館（Bibliothèque Nationale），パリ市歴史図書館（Bibliothèque historique de la ville

de Paris)，アムステルダムの国際社会史研究所（Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis）等の一次資料を渉猟して本書を執筆した。

本稿では，次節以降（III～V），このサットンの著作の第1章から第4章，第5章から第7章，第8章から第10章について内容を紹介するとともに，その問題点を指摘することにしたい。

III

1848年末カベがイカリア共同体建設のために渡米するまでのイカリア主義の歴史は，当然カベの思想と行動に焦点を当てたものとなる。論点は，(1)カベの共産主義思想形成過程，(2)『イカリア紀行』の思想，(3)イカリア主義の普及，(4)渡米までの経緯，に絞られる筈であり，以下順に著者の分析を検討して行こう。

(1) 著者によれば，ロンドン亡命中に目の当たりにしたイギリス資本主義の実態に並んで，フェヌロン（Fénelon），モレリ（Morelly），バブーフ（Gruccus Babeuf），トマス・モア（Thomas More），メルシエ（Louis-Sebastien Mercier），オーエン等の諸著作がカベの共産主義思想の形成に大きく寄与したとされている。[16] その思想構造の内的連関の分析は，本書の枠組みを越えるものであるとしても，共和主義から共産主義への思想的進展の問題は，『イカリア紀行』と同時期に執筆された『フランス革命の民衆史』[17]の検討によって一定の分析が可能な筈である。フランス革命，就中ロベスピエール（Maximilian Robespierre）の評価を通して，カベは「共和主義から，所有も貨幣もない社会という彼自身のユートピア的夢へと急速に移行した」（p.18）という著者の説明は，カベのフランス革命観を明らかにしているとは言えない。カベがジャコバン独裁を正当化し，ロベスピエールに共産主義思想を見いだしたとしたら，共和主義と共産主義の関係がその独自の歴史観の中で検証されなければならないだろう。

(2) イカリア主義の全史を意図する著者は，イカリア共同体の分裂と破綻の原理的な要因を『イカリア紀行』の中に見いだし，これを批判的に分析しようとする。「カベは『イカリア紀行』において，逆説とは言わないまでも，未解決の二元論を創り出した。一方において，完全な民主主義，調和，幸福の楽しい絵をスケッチした。……しかし，他方において，多数の意志に基礎づけられる統一性によって個人的選択と発意が破壊される共同体を描写した。」（pp.29-30）理想の共産主義国家イカリアが胚胎する最大の問題を著者はこのように指摘する。一言で言えば，カベは自由と強制の対立をユートピアの中に解消させ

(16) 『イカリア紀行』の中の「平等と共同体に関する哲学者たちの見解」は，カベの思想形成をある程度跡づけている。cf. *V.I.*(1840), tome II, pp.382-458. *V.I.*(1848), pp.470-527.

(17) Etienne Cabet, *Histoire populaire de la Révolution française de 1789 à 1830, précédée d'une introduction contenant le précis de l'histoire des Français depuis leur origine jusqu'aux Etats généraux*, 4 vols., Paris, 1839-40.

てしまったことになる。諸個人の意志と全体の意志が常に完全に一致する理想社会を描くことによって，そこに潜む原理的な対立を捨象してしまっている。イカリアは，従って「専制のある形態を別の形態に代置した」(p. 30) ものに過ぎなくなるのである。これは，カベにおける共和主義と共産主義の問題としても把握されるだろうし，後のイカリア共同体の実態を視野に入れれば，民主主義と独裁の問題としても現れる。とすれば，「民衆によって選ばれた独裁者 (dictateur)，善良にして勇敢なイカール(*Icar*)[18]」によって共産主義が導入されたというイカリアの歴史がカベの歴史観との関連において検討されるべきだったろうと思われる。さらに，著者は，カベの労働論，女性論の不十分さを指摘している。労働に対しては「必要悪」という認識しかなく，余暇の娯楽と教養が寧ろイカリアの連帯を支えている。女性に男性と同様の知的能力を認めながら，女性の権利は制限され，性に関しては極めて厳格な保守主義に止まっている。著者の指摘するこうした点は，フーリエの「ファランジュ」との比較において明確になるだろう。独自の情念論に基づく魅力的労働論と性の全面的な解放を含む女性解放論に基礎づけられるフーリエのユートピアとはまさに対蹠的な位置にあるユートピアが，同時代に提示され，広範な影響力を持った，その歴史的意味が問題なのである。

(3) カベのユートピア思想が受容される過程の分析は，1840年代の政治運動，労働運動の特質を考察する上でも重要な課題である。著者は，『イカリア紀行』以後のカベの「変質」を射程に入れつつ，その受容のあり方を考察している。カベは，1843年の夏以降メシア的口調で語るようになり，1846年の夏に『真のキリスト教 (*Le vrai christianisme suivant Jésus-Christ*)』を刊行，共産主義とキリスト教の同一性を主張する。自分自身を徐々に「不滅のイカール」と同一視し，デザミ (Théodore Dézamy) をはじめ，自分の思想や計画に疑問を持つ者はすべて無視されるか追放された。しかし，『ル・ポピュレール』は，最も購読者数の多い新聞の一つに数えられ，1846年までに100の県のうちの79県で，10万人と見積もられる数の男女がイカリア主義者になった。暴力の否認と漸次的，平和的変革の主張によって，カベの共産主義思想は熟練職人の注目を集めた。彼らの多くは暴力革命の思想を否定する一方，ブルジョワジーとの連携は念頭になかった。彼らは，その温和な「財産共同体」，理性的民主主義，健康的な環境，結婚と家族への賛美とともにカベのイカリアを受け入れた。典型的なイカリア主義者は，30歳から40歳の間の読み書きのできる既婚の熟練職人で，ロマンティックな利他主義，内省的思考，キリスト教的倫理への傾向を持っている。1840年代，産業化の進行によって駆逐されつつある彼らにとって，イカリアはひとつの救いだった。

こうした著者の分析は，基本的にジョンソンの研究を踏まえたものであるが，イカリア

(18) *V.I.* (1840), tome I, p.64. *V.I.* (1848), p.39.

主義の普及の説明としては充分に説得的なものとは言えない。暴力の否認，自律性への希求は，1839年の季節協会（Société des saisons）蜂起後労働者の世界に傾向的に言えることであり[19]，またキリスト教的モラルと労働者解放の理念はこの時期強い親縁性を持っていたと考えられる。例えば，ラムネ（Félicité de Lamennais）の『一信者の言葉（*Paroles d'un croyant*）』（1834）を熱狂的に支持する層とイカリア派の労働者はどのように重なっていたのだろうか。この時期，ラムネと並ぶ「キリスト教的社会主義者」と呼ばれるビュシェ（P.-J.-B. Buchez）は，1831年労働者アソシアシオンの構想を示している。1840年以降この構想を引き継いで運動を展開した『アトリエ』派の労働者とイカリア派の労働者は，著者の叙述から見る限り，状況と志向をほぼ共有していたと考えられる。彼らにおける「財産共同体」と「労働者アソシアシオン」の位相が明らかにされれば，イカリア派の研究は一挙に視野を拡大しうる筈である。

(4) 著者は，カベのアメリカ移住計画を1843年3月の手紙に見いだしている。この計画からカベの実際の渡米までの経緯は勿論単線的ではない。著者の説明を見よう。1847年5月『ル・ポピュレール』にイカリア移住計画を発表したカベは，オーエンの助言を得て，テキサスに共同体を建設することを決意する。その背景には，1847年恐慌とイカリア主義者の一部の過激化という状況があった。この計画が，カベの信奉者たちに広く受け入れられた訳ではなく，イカリア主義をフランスの政治勢力の中に位置づけようとする者は，カベを卑怯者，臆病者呼ばわりし，貧しいイカリア主義者は，カベが600フランの移住資金を要求した点を厳しく批判した。こうした批判の中，カベによって選ばれ，資金を提出した69人が1848年2月3日ル・アーヴルを出発したのである。二月革命が勃発すると，カベは，出版の自由，生活必需品に対する課税の撤廃，すべての市民に対する教育を柱とする『イカリア共産主義者への宣言（*Manifeste aux communistes icariens*）』を発表する。私的所有に対する攻撃は行わず，共和主義の立場から3月17日のデモでは群衆の先頭に立ったが，カベとイカリア派は危険な共産主義者と見なされた。身に危険が迫る状況の中，4月25日，「中央友愛協会」の集会でカベはアメリカ移住を宣言する。

イカリア移住計画から渡米までのカベの思想の振幅を，著者は状況の論理で処理しているように思われる。1843年に既に渡米構想があったとすれば，カベのアメリカ観が明らかにされた上で[20]，渡米構想の一貫性と状況の論理との関係が分析の対象とされなければならない。この著者には，カベを七月王政期の歴史的・思想的状況の中に位置づけようとする

(19) cf. Alain Faure et Jacques Rancière, *La parole ouvrière 1830/1851*, Paris, 1976, pp.206-207.

(20) プルドモーは，カベがアメリカを共同体建設の地として選んだのは，シュヴァリエやトクヴィルの著作を通じて知ったアメリカの民主主義に期待していたからであると推定している。cf. Prudhommeaux, *op.cit.*, p.141.

視点が極めて希薄であり，「ルイ・ブラン，ピエール・ジョゼフ・プルードン，ジャン・ジャック・ピヨー（Jean-Jacques Pillot），テオドール・デザミのように，階級闘争（class revolution）を説くラディカル・コミュニスト」（p.32）といった粗雑な表現で同時代の思想が括られることには，読者は驚きと失望を禁じえないだろう。1840年代に提出される様々な社会改革プランは，七月王政への対抗という政治的理念と労働者の貧困という社会的現実によって基礎づけられていると言っていい。1848年におけるカベの思想と行動も，共和主義と共産主義の関係を分析する視点を持てば，「180度転換」（p.50），「カメレオン的」（p.51）といった安易な裁断は避けられた筈である。

IV

アメリカでのイカリア共同体建設の実態については，邦語での紹介は全くなされていないと言ってよい。本節では，カベのアメリカ到着からその死までを描いた第5章から第7章までの要約から始めることにする。

1849年1月19日ニューオリンズに到着したカベを出迎えたイカリア派480人は，既に二つの集団に分かれていた。テキサスに向かった先遣隊は，苛酷な気候と劣悪な条件の中で疲弊し，植民は絶望的な状況だった。「教父」カベの到着に涙を流し，彼にイカリアの夢を託す者がいたが，200人は帰国を決意し，カベに資金を精算させた。1849年3月15日，カベと280人は新たな共同体建設の地イリノイ州ノーヴーに到着する。1年間に20人以上の死者を出すなど災難にも見舞われたが，排斥されたモルモン教徒の建物を利用しながら次々に施設が作られ，最初の2年間で365人にまでメンバーを増やした。

1850年2月21日，共同体の成人男子は全員一致で183か条，4章から成るイカリア憲法を採択する。この憲法によれば，共同体は「民主主義的共和国」と呼ばれ，毎年大統領が選出される。「取締役（gérance）」は半年毎に選ばれ，財政，衣食住，教育，健康，農・工業について指導を行う。「一般議会」がすべての立法権力を持つ。女性は，発言権は持つが，女性に関わる問題以外については投票権を持たない。議会は2年毎に憲法を見直し，また司法権を行使する。600フランを支払った者は4か月の見習い期間の後，成人男子4分の3以上の賛成を以て正式の入会を許される。退去は自由であり，入会料は返還される。

共同体の中にはカベの統制に対する不満の声は早くからあり，1851年2月20人が脱退した。一方，フランスでは，アメリカから帰国した旧メンバーがカベを詐欺罪で訴えていた。1849年9月29日，懲役2年，罰金50フラン，5年間の政治的権利の停止が欠席裁判で宣告されたため，カベは1851年6月パリに赴き，無罪を勝ち取った後，1852年7月20日ノーヴーに戻ってくる。ノーヴーの共同生活は，その後順調には推移しなかった。作業監督からカベへの報告はおざなりになり，カベが3か月毎に労働の配置替えをすることにも不満が募った。共同体の命運を担う農業は，経験者

を欠いていた。衛生，病気の問題も深刻で，これが労働力の不足を招いた。1854年までにカベも貧困状態を認識したが，労働量を増やすこと以外に方法はなく，共同体内には無気力が蔓延する。カベは経済問題に関しては全く無能だった。

カベが『イカリア紀行』で示した音楽，ダンス，演劇，フェスティヴァルは，日常生活の中に組み込まれていた。カベは当時イリノイ州で最大規模の4000冊所蔵の図書館を作り，日曜の午後には「イカリア講義」が行われた。イカリアの基礎である学校教育は，寄宿舎制で行われた。しかし，イカリアの知的・文化的高尚さは次第に息苦しいものとなり，カベは，秩序と道徳を強調するにつれ，独裁的で不寛容になっていった。1855年，非婚姻者間の妊娠という事件が起こった時，二人は追放される。

カベは，共同体内の道徳が低下していることを憂い，1853年1月9日徹底的な綱紀粛清を旨とする「重大な改革」を発表する。カベはさらに全面的な法改正を望み，その48か条提案が議会で採択された1853年11月から，イカリアは内乱状態となった。1854年秋，財政破綻を巡って「取締役」の二人，ジェラール（Jean-Baptiste Gérard）とマルシャン（Alexis-Armel Marchand）がカベと衝突し，行政の縮小，酒醸所の拡大による財政再建を主張した。禁酒，禁煙，職場での私語禁止，職業選択の不自由等も問題になり，共同体内はカベ派と反カベ派に大きく割れた。

1855年12月，カベは大統領を1年制から4年制に改め権限を強化するなど，自己の独裁の強化を図った最終提案を行い，これに抗議してジェラールとマルシャンが役職を辞任した。カベに反旗を翻した「多数派」は，カベの「改革」が憲法に違反することを主張した。1856年2月に両派の一時的な和解がなされたが，その後，「会計監査委員会」はカベに会計資料の提出を求め，そこに巨額の矛盾があることが指摘される。5月3日，カベは『全ての真実（*Toute la vérité*）』というパンフレットで反論し，1856年5月12日の議会は両派の対立を決定的なものにする。

5月13日の朝から，ノーヴーには完全に別組織の二つの共同体ができ，8月には両派が衝突して騒乱となった。10月13日，カベは，セントルイスで共同体を作ることを支持者に提案し，カベの全面的独裁を求める『イカリア人の権利宣言』を発表した。1856年11月6日，カベと179人のメンバーはセントルイスに集結するが，翌朝カベは発作に襲われ，11月8日朝5時，68歳で没する。

以上の要約から，イカリア共同体の内紛の問題が，つねにカベの「独裁」と関わっていたことが分かる。著者は，1827年の「フランスの統治に必要な革命論（Exposé d'une révolution nécessaire dans le gouvernement de France）」に既にカベの独裁概念が示されていることに言及しているものの（p.6），「過渡期独裁」というカベの論理を正面から取り上げていない。カベは，『イカリア紀行』でイカリア国における「過渡的体制（régime transitoire）」を詳述しただけ[21]でなく，1850年

(21) *V.I.*(1840), tome II, pp.200-221. *V.I.*(*1848*), pp.357-371. 中谷，前掲書，111-115頁，参照。

にも，1848年革命を総括した論文でフランスにおける過渡的独裁の必要を説いている。[22] カベの叙述が多くの点を曖昧なままに残しているとしても，イカリア共同体における独裁的体制の問題は，カベの歴史観，民衆観や民主主義の理念と深く関わっていたと考えるべきだろう。

また，著者は，フーリエ派のファランジュとの比較においてイカリア共同体の特質を析出しようとするが，ここでも本質的な点は抜け落ちている。先にも触れたとおり，両者の最大の相違は，イカリアがフランスからの移住者による共同体であったのに対して，ファランジュがフーリエ主義を導入したアメリカ人の共同体であったことに存するのであり，この点を検討することなく，両者とも財政問題で失敗したとかフーリエ主義は個人主義的だったといった皮相な比較をしても，イカリアの特質は浮き上がってこない。アメリカにおける共同体の歴史の中にイカリアとファランジュを位置づける視点をこの著者が全く持っていないことに，読者は寧ろ奇異な印象を受けるだろう。アメリカのフーリエ主義に関しては，既に1991年にガーネリの大著が公刊され，[23] 綿密な思想史的分析が行われているのである。

V

カベ没後のイカリア共同体の推移を扱った第8章から第10章までについても，著者の叙述をまず見ることにしよう。

カベを失ったセントルイスの「少数派」は，1856年11月10日，共同体の再建を誓う。当初，セントルイスの街で職を得つつ半共同体生活を続けていたが，大統領メルカディエ（Benjamin Mercadier）は，本格的な共同体建設のためにチェルトナムという半都会に土地を購入，一行は1858年5月に出発した。この土地購入は財政上危険な賭けだったが，新大統領は経済手腕の上ではカベ以下だった。大統領の独裁的権限に対する批判は再三出されたが，これにはカベ同様綱紀粛清をもって対抗し，規約に逆らう者の退去が宣言された。44人が去り，その痛手はすぐに共同体を襲うことになる。1859年3月の分裂以前には，ノーヴー時代のような共同生活が行われていたが，その後多くの病人が出て，労働力は不足し，財政的にも困窮した。1861年南北戦争が勃発し，これが致命傷となった。1864年1月，十数人にまで縮小された共同体の解散が決定された。大統領ソーヴァ（Arsène Sauva）は「多数派」に合流する。

一方，カベ派の追放後，ノーヴーの「多数派」221人は以前よりも快適な生活を享受していたが，財政状況は容易ならざるものであることが報告され，1857年4月の議会で資産の売却とアイオワ州コーニングへの移住が可決された。当初は未開拓の地ゆえの様々な困難が付きまとったが，イカリア人の勤勉さに

(22) Etienne Cabet, "France — What must be done after a Revolution?" *The Democratic Review*, London, September 1850, 136-139.

(23) 註(10)を参照。

よって，また南北戦争がもたらした思わぬ僥倖によって，新しい共同体は繁栄への道を歩んで行く。1870年までに共同体は変貌を遂げ，700エーカーの耕作地，40頭の馬，140頭の牛，600頭の羊を飼育するほど豊かになった。ここでは，カベ的な権威主義的統制の再現は望まれなかった。大統領の権限は，外の世界に対して共同体を代表するに止まり，共同体内部を統制することはなかった。「取締役」も，議会が決めた任務を遂行するだけである。女性の権利は制限されていたものの，チェルトナムから合流したソーヴァは，ここに「純粋な民主主義」を見いだした。ここでは，従来の共同体とは異なり，家族毎の住居形態を取っていた。強制的な仕事の割当もなく，統一性や服従の必要も認められなかった。外側の世界と共同体との間の境界も緩やかになっていた。

しかし，1870年代の中頃には，共同体内部に二つの相反する集団が形成されていた。一方はマルシャンに率いられる古いイカリア人であり，他方は，1870年以降に入会した者とイカリア二世である。「進歩派」のほうは，共同体のあり方の根本的な変革を要求していた。1871年のパリ・コミューンに刺激され，世界的な運動とイカリア共同体との関係を問題にしていた。1876年，ジュール・ルルー（Jules Leroux）とその妻の入会許可問題が発端となって「保守派」と「進歩派」の間に戦いが起こり，1877年9月26日の議会以後二派は分かれて生活することになる。「進歩派」は，真のイカリア人の使命は一般利益と人民の大義への献身であり，女性にも平等な権利が与えられるべきこと，カベの著作を盲目的に信仰するのではなく，科学的論証，経験，討議等に基礎を置くべきこと，善良な道徳を持った人間には入会を許可すべきことを主張した。また農業に基礎を置くことを止め，手工業製品を生産販売すること，不平等，個人主義の源泉である家族別住居を廃止し，共同建物内に住むことを要求した。「保守派」は食料供給を拒否する等の策略で「進歩派」の追い出しにかかり，闘争は裁判に持ち込まれる。1878年8月，判事は，イカリア共同体が州の法人法を侵していることを理由に設立許可の取消を宣言し，コーニングの土地は二つに分割された。

1879年10月に採択された「進歩派」の憲法は，大統領制を廃止し，男女平等の投票権を認めた。暫くの間は，再組織化された「進歩派」のユートピアは繁栄していた。1880年末には，72人の名前がこの「若きイカリア」に登録され，『若きイカリア（*La Jeune Icarie*）』という新聞も発行された。借金も縮小され，生活水準，文化水準は様々な活動によって上昇した。しかし，民主的であるがゆえに，誰も強力なリーダー・シップを発揮することができないという状況が続き，統制が取れなくなった。1881年までに多くの離脱者があり，店舗は閉鎖された。

社会主義労働党（Socialist Labor Party）のエミール・ベー（Emile Bée）[24]の協力を得

(24) この全く無名の人物に対してサットンは殆ど何の説明もしていないが，プルドモーによれば，七月王政期の秘密結社運動にもパリ・コミューンにも参加したフランス人で，当時サンフランシスコ↗

て，サンフランシスコから80マイル離れた小さな町で共同体の再建が図られた。その新しい共同体は，ジュール・ルルーのかつての新聞『希望（*L'espérance*）』に因んで，イタリア語で「スペランツァ（Speranza）」と名付けられた。1883年までにアイオワの土地を売って，借財は縮小したが，自給自足の共同体という目的は達成されない。彼らは共同体の維持に十分な人数を持っていなかったし，新しいメンバーを獲得することもできなかった。規模の問題だけではなく，店舗の失敗，財政破綻などの問題などがあった。資金を提供していたサンフランシスコの社会主義者たちは，共同体の破産を恐れて訴訟を起こしていた。法廷は，1886年8月3日，イカリア・スペランツァを解散し，残った資産を売却して債権者に償還することを決定した。保守派のマルシャンによれば，イカリア・スペランツァの失敗は「財産共同体」というイカリアの原則をほぼ全面的に放棄した点にある。1883年に採択された「契約」は，道徳的，禁止的な規則を設ける一方で，各人への配当金を労働に対する刺激として認め，私的所有を許していた。

一方の「保守派」は，「新イカリア」として継続していた。彼らは過去の失敗を憲法の曖昧さに求め，29条からなる新しい文書を作成した。彼らは「アソシアシオン」として再組織化を図った。しかし，女性には相変わらず制限された投票権しか与えられなかった。「新イカリア」への入会は極度に制限され，10分の9の多数の賛成が必要とされた。命令への服従は強制され，共同体の生産物は，議会の承認を得て，大統領のみが配分しうる。彼らは，経験とイデオロギーによって結びつけられた農民家族となり，外部との関係も殆ど持たなかった。新イカリアはこうして徐々に衰えていく。次々に会員は共同体を去り，新規の参加者はいなかった。1895年2月3日の先遣隊出発記念日には8人の老人しか残っていなかった。誰も大統領になる者がいなかった。2月16日，正式な解散が全員一致で決められた。続く3年の間に，資産の分配の詳細はゆっくりと組織的に決められ，1898年10月22日，最後のイカリアは，正式に解散した。

イカリア共同体の「自然死」までを美しく描いたサットンの叙述から，イカリア共同体の分裂と挫折の要因をカベの思想が孕んでいた矛盾の中に見いだすことができる。独裁と民主主義の問題の他に，「進歩派」の主張した男女の平等な権利，イカリア共同体の世界内での位置づけ等の問題である。女性の政治的権利の問題は，著者がカベの矛盾として指摘した点であるが，これは，カベの限界として扱うよりは寧ろ19世紀の思想史の文脈の中でサン-シモン主義やフーリエ主義と対比しつつ考察することによって，カベの独自性が明らかになる点だったのではないだろうか。そして，「進歩派」の男女同権の主張は，世代の問題というよりも，世界的な女権運動の展開の中に位置づけてこそ意味をもつものと思われる[25]。共同体と外部世界との問題は，カ

↘で社会主義労働党の支部を指導していた。cf. Prudommeaux, *op.cit.*, p.575.

(25) cf. Georges Duby et Michelle Perrot (sous la direction de), *Histoire des femmes en occident*,↗

べにおける共和主義と共産主義の問題としても捉えられる。イカリア共同体を世界内存在としてどう位置づけるのか，これはカベの1848年革命評価やアメリカ移住構想の根幹に関わる問題ではないだろうか。

「進歩派」の思想は，共同体内部における論争として処理することはできない。例えば，ジュール・ルルーは，社会主義者ピエール・ルルーの弟で，1833年のパリのストライキに際して労働者アソシアシオンの設立を主張した印刷工として著名であり[26]，ルイ・ボナパルトのクーデタ後，兄ピエールとともにイギリスに亡命している。イカリア・スペランツァの命名がルルーに由来するとすれば，そこに何らかの思想的影響関係があると看做すべきだろう。また，パリ・コミューンの闘士が「進歩派」の論客として登場したことは，イカリア共同体が新たな段階に入ったことを意味する。ここに，イカリア共同体の歴史をフランス史と結び付ける恰好の材料が提供された筈であるが，この点に関して著者は何ら言及していない。「若きイカリア」と社会主義労働党との関係も資金援助の問題に還元され，アメリカ史の中のイカリア共同体という視点が著者には欠落している。また，「新イカリア」が「アソシアシオン」として再組織化されたという点は，七月王政期のアソシアシオニスムとの関係からも，アメリカのフーリエ主義者たちが「アソシエーショニスト」と称していた[27]ことの関係からも，ひとつの論点になりうるだろう。

VI

サットンの新著が，資料面でイカリア主義研究に新たな局面を提示したことは間違いない。「イカリア研究センター」の資料を中心に新資料を発掘し，その所在を明らかにした功績に対しては勿論充分な敬意を払う必要があるだろう。しかし，それが，これまでの研究史を凌駕するイカリア主義像を提示したかと言えば甚だ疑問と言わざるをえない。「ヨーロッパとアメリカにおけるユートピアの夢」という本書の副題は，ヨーロッパとアメリカの思想的・人的交流，新たな「世界史」段階の到来を前提にしたイカリア主義の研究を予想させる。しかし，極論すれば，本書においてはヨーロッパもアメリカも存在していない。世界から隔絶された小さな共同体の歴史が微細に語られているだけである。

アメリカにおけるフーリエ主義の研究が，フランス思想のアメリカへの土着化という問題を軸に「世界史」的視点を持ちうるのは，勿論，アメリカにおけるフーリエ主義受容の固有なあり方に一義的には規定されているだろう。イカリアが終始フランス人の共同体であった以上，こうした分析視角をそのまま適用することはできない。しかし，カベやイカ

↘ tome IV, Le XIXe siècle, Paris, 1991.

(26) cf. Jules Leroux, *Aux ouvriers typographes : De la nécessité de fonder une association ayant pour but de rendre les ouvriers propriétaires des instruments de travail*, Paris, 1833.

(27) cf. Guarneri, *op.cit.* p.95.

リア派のアメリカ観という視点からでも，イカリア主義を「世界史」の中に位置づけることは可能である。例えば，カベがノーヴーを引き払おうと決意した原因のひとつが，「アメリカの個人主義に汚染されないため」(p. 68) であったとしたら，カベがアメリカに期待したのは未開拓の処女地の提供だけだったのだろうか。共和主義者として出発し，1848年においても共和政実現のために戦ったカベにとって，アメリカの「民主主義」体制とイカリア共同体との関係はどのように捉えられていたのか。あるいは，社会主義労働党と協力関係にあった「若きイカリア」にとって，また「共和党の候補者に決まって投票すること以外政治問題に全く関心を持たなかった」(p.141) と言われる「新イカリア」にとって，19世紀後半のアメリカは何を約束する地だったのか。さらに言えば，様々な共同体実験の地にあって，イカリア共同体はいかなる歴史的意義を持つものだったのか。

半世紀に及ぶイカリア共同体の実験は，「創始者」カベの理念が次々に裏切られていく過程でもある。一方において，それはカベの理念が内包する矛盾あるいは欠如の露呈でもあった。その点について著者は意識的に叙述している。しかし，ともかくも半世紀もの間イカリア主義を掲げた共同体が存続しえたという事実は，カベの思想の歴史的意義を改めてわれわれに問い掛ける。1848年以後のフランスでカベが持ち続けていた一定の影響力の検討とともに，今後の課題として残る点だろう。また，イカリア主義が変質していく過程は，共同体の内部を描写するだけでは分析しえない。アメリカでの共同体の実験は，真空管の中の実験ではない。アメリカの処女地が，政治や経済や文化の影響を免れる無菌状態の「真空地帯」でなかったことは，著者自身の語るイカリア共同体の歴史からも窺い知ることができる。孤立した共同体の内部にさえ「世界史」の展開が及んでいること，ここにこそ，イカリア主義の歴史を描く意味があるのではないだろうか。イカリア主義の歴史の研究が，研究の名に値するものとなるためには，やはり歴史の中のイカリア主義を明らかにしなければならないのである。

著者の意図がイカリア共同体の「正確な」通史を描くという基礎的な作業に限定されていたとすれば，ここに提示された新資料の読解を通したイカリア主義の「本格的な」研究は，本書を手にしたわれわれに委ねられていると考えるべきだろうか。本書は，逆説的に，イカリア主義の歴史がひとつの「世界史」たりうることを示唆した。フランスでは，1848年革命から第二帝政，パリ・コミューンへと，アメリカでは，ジャクソニアン・デモクラシーから南北戦争，再統一へと続く激動の時代，まさに，ヨーロッパとアメリカの理念と運動の結節点としてイカリア共同体は現れうるのである。イカリア主義研究の領野には，かつてのアメリカがそうだったように，未だ広大な沃野が残されている。

(経済学部助教授)